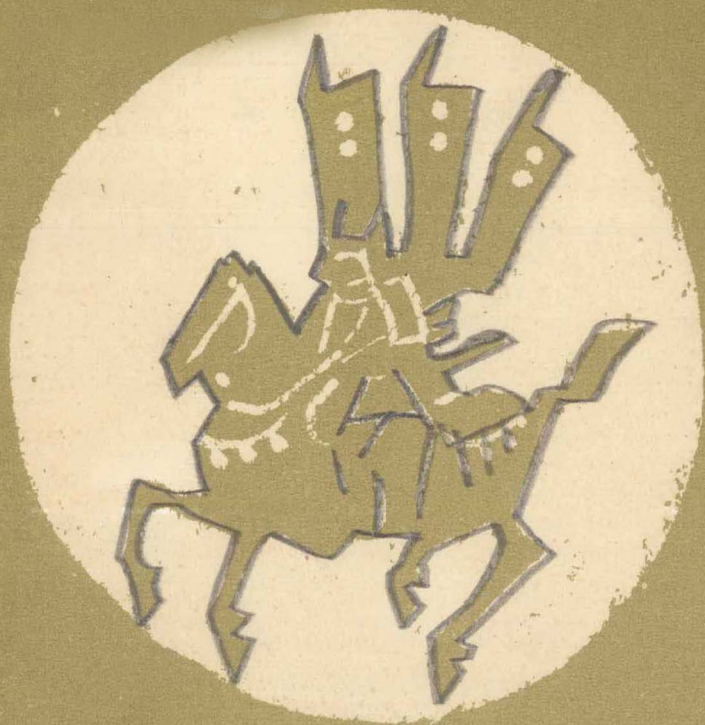






戰國祕卷

後篇

中山義秀

新潮社版

戰國秘卷(後篇)

昭和三十三年八月二十一日 印刷
昭和三十三年八月二十五日 發行

定價 二二〇圓

地方 二四〇圓
賣價

著者 中山義秀

發行者 佐藤亮一

印刷者 曾根盛事

發行所 株式會社新潮社

東京都新宿區矢來町七一
電話東京(34)代表(七一)(五)
振替東京八〇八番

亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

戰國祕卷（後篇）目次

日永……………	セ
父の呼び聲……………	三〇
兄弟……………	三四
病葉……………	四六
春晝夢……………	五九
浮草……………	七三
社鼠……………	八四
東と西……………	九七

新しい太陽	二〇
生贄	二三
身替り	二五
湖にそそぐ雪	四七
草の命	六〇
血祭り	七三
三方ヶ原	八六
春がすみ	九

裝
幀
杉
本
健
吉

戰
國
祕
卷
(後篇)

日^ひ

永^{なが}

一

駿河の國、大宮の社人町である。

富士淺間神社前參道の櫻並木の下で、櫻の一株に馬をつなぎ、いい氣持でいねむつてゐる女子。

「こりや、馬子。そこなる女」

呼起されて目をさまし、相手をみると中年の武士、馬子をみて笑いながら、

「春の日永とはいえ、よく睡るのう。馬をひとつ頼みたい」

女は黙つてたちあがると、櫻の幹から馬の手綱をとりて、武士の前へひきだしてきた。

「甲州まで、なんぼほどでまいるぞ」

女馬子はびつくりしたように、兩眼をみはりながら首をふつて、

「甲州へ行かつしやるか。そりや駄目じや」

武士は一人旅の自分を、用心する意味にとつたものらしく、

「女の身故、遠道はならぬと申すか。あはゝゝゝ、無理もない。しかし、安心いたせ、そちがなんぼう可愛ゆうても、亂暴はいたさぬ」

武士がことさら、そのように言譯するのは、この邊の女馬子にしては、珍らしく器量好しだからだ。といつても、顔全部が見えているのではない。

頭に菅笠をかぶり、顔の半分を手拭で覆うているのだが、その間からあらわれている顔色が白くて、目もとがすずしい。手拭をとつたら、恐らくあつと驚くばかりの器量かもしれぬ。

年のほどは二十六、七、からだつきは痩せがたですんなりしているし、客の中にはずいぶん好き心を起す者も、すくなくあるまいと察せられる。

しかし女馬子は、そうした事に頓着なく、

「うんにや、甲州街道には關をたてて、誰も通さねいだよ」

「しからば道をかえて、御殿場口から須走の方へ出よう」

「それも駄目じや。本栖街道も山中湖道も、一切往來止めになつてゐる。身延街道も、おなじことよ」

三道がだめならば、もう甲州へ入る道はない。

「いつの頃よりして、そのようにきびしゆう相成つたぞ。武田と今川の兩家は、懇親をかさねた姻戚ではないか」

この時より十數年前の天文二十三年三月（一五五四）、武田、今川、北條の三家は互に婚姻をかわして、攻守同盟をむすんだ。

武田信玄の姉は、今川義元の夫人となり、義元の娘は信玄の嫡子、太郎義信の室となつた。義元の嫡子今川氏眞うじまは、信玄の甥にあたる。

そのような兩家が國境をとぎして、國交斷絶の状態にあるというのは穩でない。武士の疑問に、女馬子が答えて、

「去年の秋から、急に仲が悪うなりましたじや。信玄殿がおソ曹子の義信殿を、糺きゆうめい明して殺したとかいうことで、奥方の今川夫人が駿府（静岡）へもどつてきた。それから事がもつれだして、お舅しやうとの信虎殿も三十年近くすみなれた、駿府の館やかたを逃げだし京へのぼつてしまつたそうな」

武士はうなずき、

「なるほど、そうであつたか。やれやれ、それは大變じや。おツつけ兩家の取合せが始まると見ゆるな」

「もう、始まつておりますぞえ。駿河から甲州へ送る、鹽の手をたつたというので、越後の輝虎殿が鹽を甲州へ、送つたとか申します」

「それは、偉いものじや。しかし、かの信玄のこと、さほど恩には思うまい」

「山國の甲州にも、海賊衆（海軍）がおるそうじやから、甲州は困らぬにしても、信州の方では困りましょう」

「左様、信州は困る。かしこは、大國じやからな」

「お客様は信州を、存じていられますか」

武士はなにやら、曖昧な態度で、

「知らぬこともないが、さしあたつては甲州のこと、はて如何いたしたものであらう。ともあれ、女馬子、そちの名は、何と申すな」

「お虎と申します」

「お虎か。優しい姿に似合わぬ、いかめしき名であるわい。ともかくその馬をひいて、あの社前まで来てもらおう」

「お客様が乗るのでは、ありませぬか」

「じつは、他に連がある」

「この馬にお前のような方が、二人乗るのは、ちと無理じやな」

「二人ではない。その連の方に、乗ってもらう」

「そして何處まで、参りますのじや」

「甲州方面がだめならば、海道の吉原の方へ、まわつてみるより仕方があるまい」

「東へお下りでありますか」

「まず、そんなところじや」

浅間神社は木花咲耶姫を祭つてあるといふので、境内にも櫻の木をはじめ花木が多い。櫻はまだ苔だが、梅はすでにひらいている。

その樹林の中に、腰掛け茶屋があつた。梅樹の下に釜をかけ、一杯二、三文で茶をたてている。領主の北條氏眞が戦亂をよそに、風流踊に贅をつくしたりするものだから、領民にもどことなくのんびりとした風があつた。

茶屋の腰掛けに、連の武士がからだを休めていた。三十歳をでたばかりの壯年だが、からだつきが華奢で顔色が青白い。動作も静で、病身らしく見える。

中年の武士は、彼の前に小腰をかがめ、

「遅なりました。あれへ馬を呼んでまいりましたから、お召し下されませ」

「それは大儀であつた」

若い武士は相手に會釋しながら、赤緒の菅笠をかぶり、黒布子に手甲、脚半姿の女馬子をながめて、

「まだ若い女子のようじやな」

「男はみな馬借（馬方）に出て、質馬は女子が多いようでござります。しかし、まだお山開きの季節ではありませぬので、客待ちの女子はあれ一人、暇だとみえて居睡りをしております。ははゝゝゝゝ」

「武士の身で女馬子の厄介に相成るのは、よそ目にもいかかと思われるが、からだは何やら大儀でならぬ故、しばらく馬の背を借りよう」

「お氣遣いにはおよびませぬ。中國よりの長道中、さぞお疲れなされましたでしょう。さア、お召し下されませ」

中年の武士は茶代を拂うと、境内をでて若い武士を馬にのせた。それから女馬子とならんで、道があるきながら、

「お虎と申したな。急がずとも、ゆつくりしてよいぞ」

お虎はそれには返事せずに、若い武士の衣紋にしきりと眼をそそいでいる。馬の手綱をとつて先を歩きだしながらも、時々後をふりかえつて、馬上の武士の姿に目をやるのは、何か氣になることがあるらしい。

若い武士はそれとは氣づかず、馬上から供の武士に聲をかけて、

「主膳、この道は、甲州街道とは違うようじゃな」

「この馬子より承わりますと、甲州口は一切往來止めじゃそうにござります。そう聞けばなるほど、甲州方面の街道に、旅人や商人らしい者の影は、さっぱり見えませぬ」

「それは又、どうしたわけじゃ」

「昨年以來甲州とこなたと、手切れになつたそうで、今にも取合せが始まりそうな形勢にござります」

「してみると三河の岡崎の宿で、聞いた噂は嘘ではなかつたのじゃな」

「どうも、そうらしく思われます」

「信玄と家康とが契約をとりきめ、大井川を境にして、駿河と遠江を互に分けどりにするといふ」

「はゝゝゝゝゝ、此處で左様な噂を口にされますと、禍の門になるかもしれませぬぞ」

「駿府はとうに過ぎて、もはや伊豆も間近い。さほど懸念するにも、あたらぬことじゃ」

主膳とよばれた武士は、女馬子をかえりみて

「どうじゃ、お虎、氣遣いにはおよばぬか」

お虎は女子らしくもない、無愛想な口調で、

「氏眞は、馬鹿であるわいな」

「おのが領主を、馬鹿じやと申すか、はゝゝゝゝゝゝ、これは我等以上じや」

主膳が興がるのを、馬上の武士がおさえて、

「これ、女子、なぜ領主のことを、馬鹿じやなどと申すぞ」

女馬子は、少しもためらわずに、

「氏眞は家康から見離され、信玄にも見離されて、遠國の輝虎なぞを頼みにしております。信虎が館をぬけだしたのも、今川家譜代の宿老達を味方につけ、信玄をひき入れる手引にしようとした企みがバレた爲じやと申します」

馬上の武士は、彼女の物識りに感心して、

「ほゝゝ、よく左様なことを、存じておるわい。客が話を、聞かせるのじやな」

「このような稼ぎをしておれば、聞かずとも耳にはいります」

「それは、そうであろう。ところで、そちはまた若い身空で、なぜに馬稼ぎをしておるのじや」

「亭主が病氣のため、仕方なく働いております」

「それは、氣の毒。長患いとみゆるな」

「もうあしかけ、三年にもなりましょう」

「その間貞節をつくすとは、感ずべき心がけ、今時珍らしい話じやな、主膳」

主膳はほほえんで、

「十郎様も御病身なれば、他人事とは思われぬとみえまするな」

「はゝゝゝゝゝゝ、まことにその通り、生れつき弱い者は、他人の話でも身につまされる」

女馬子は二人の話に、きらりと眼を光らせ、馬上の武士を見あげて、

「お前は、十郎様と云われまするか」

武士もおなじく、彼女を見おろして、

「我が名に何ぞ、心當りでもあると申すか」

「それよりも珍らしいのは、お前の衣紋、それは何と申しまする」

女馬子は今まで不審に思っていたことを、とうとう口にだしてきいた。彼女が不審がるのも道理、彼の衣紋は兩角づうかくをはやし、四足を斜めに泳がせている獣のような、類のないものだからである。

武士は二本横筋のはいつた、絹衣の廣袖をうちかえして、

「これか。誰にもそう云つてきかれるが、これは鹿の頭かぶちじや」

「えッ、鹿の頭！」

彼女は思わず、路上にたちどまつて、

「それは、貴様の家紋でござりまするか」

相手への呼びかけが、お前から貴様にかわつたのは、それだけ相手を尊敬しだした證據、お前とよぶのは當時の敬語である。貴様はそれ以上だ。

馬上の武士は、あらたまつた彼女の態度に、同様不審をおぼえたらしく、